

茨城高等学校・中学校

校長室だより 2024年12月13日

歳末雑感

「あっ…！」という間に夏が終わり、秋が過ぎ、気がつけば12月も半ばになってしまいました。昔、諸先輩方から「とし齡をとると一年が過ぎるのが早く感じられるよ」と聞かされて「へー、そんなものかなあ」などと思っていましたが、いざ自分がその年齢になってみると、本当に一年が16倍速の走馬灯のように思えてきます。

子どもの頃、年末になると「くれいじ」を楽しみにしていました。「くれいじ」とは、地域の商店街が安売りをしたり、食べ物やおもちゃなどを売る露店が出たりして、ちょっとしたお祭りのようなイベントなのですが、茨城なまりで「くれいじ」と発音されるその催しを、人一倍のんびりした少年だった筆者は「クレイジー」だと信じて疑わず、どうして年末に行われるお祭りがクレイジーなのだろうかと、うっすらと考えていました。「くれいじ」が「暮れ市(くれいち)」だと気づいたのは、だいぶ後のことです。

筆者の家では、暮れ市でダルマを買う習慣がありました。小さいダルマから始めて、毎年少しずつダルマを大きくしていきます。徐々にサイズを大きくするには、おそらく福を呼び家運の隆盛を祈る意味があったのでしょう。ある年、四つ違いの兄と二人でお使いに出され、暮れ市にダルマを買いに行った記憶があります。ダルマのお釣りで、筆者は白いミニカーを買いました。兄はイカ焼きか何かを食べていたような気がします。お釣りは好きに使っていいと言われたのか、兄弟が独自に自由裁量権を行使したのか、そのあたりはよく覚えていません。

かつて暮れ市で賑わった商店街も、現在ではガソリンスタンドと郵便局があるだけで、肉屋も酒屋も、衣料品店も駄菓子屋も、小さな個人スーパーも自転車屋もみんな無くなってしまいました。50年という歳月は、こんなにも地域や社会を変えてしまうのだなあ、としみじみと感じずにはいられません。

江戸時代、年末は貧しい庶民たちにとってシビアな時節でした。なぜならツケで買い物をして後でまとめて支払う「掛け売り」が一般的だった当時、一年の借金を精算するのが年末だったからです。年の瀬も押し詰まった大晦日、おおみそか押しかけてくる借金取りにどう対処するか、庶民は頭を悩ませ、工夫を凝らしたのです。

落語「掛け取り」では、大晦日を迎えても返すあてのない借金を抱えた夫婦が登場します。亭主は朝から金の工面に町内中を回りますが、金を貸してくれる家などありません。女房に叱咤激励された亭主は一計を案じます。どこからか大きな棺桶をかついでくると「俺はこの中に入って死んだふりをするから、お前は“亭主は死にました”と言って借金取りを追い返せ」女房は仕方なく棺桶の脇に座り、取り立てにやってくる借金取りたちに言い訳をします。体のあちこちを自分でつねって涙まで流す演技ぶりです。

そうこうするうちに、やって来たのは人のいい長屋の大家さんです。たまった家賃の催促に来たのですが、亭主は死にました、と女房が泣き真似すると、「そうかい?!今さっきそこで会ったよ?まあしかし、人の一生なんざわからねえもんだ」と女房の言葉を疑おうともせず、大いに驚きます。線香を上げると大家はお金を紙に包み「これは少ないけれども香典代わりだ。何かの役に立てな」と女房に差し出します。さすがに厚かましいと思った女房は「いいえ、これはいただくわけにはまいりません」と断りますが、大家は「いいから取っておきよ」「いただくわけにはまいりません」「取っておきなよ」「いいえ、いただくわけには…」。二人が押し問答をしていると、棺桶の中から亭主がむっくり起き上がって「遠慮しねえでもらっておきな」

腰を抜かした大家さんは一年後の次の大晦日になっても病院通いをしている、というのがオチです。厳しい年末をサバイブして迎えた正月は、江戸時代の人たちにとって、心底晴れやかでめでたいものだったのでしょう。

今年も多くの出来事がありました。元日の能登半島地震に始まり、パリオリンピック・パラリンピック開催、新紙幣発行、政治家の裏金問題、能登半島豪雨、トランプ氏の米国大統領選勝利、MLBでの大谷選手の活躍、日本被団協のノーベル平和賞受賞など様々な話題がメディアを賑わしましたが、筆者個人として印象に残ったキーワードは「政治」と「SNS」です。

2024年は注目を浴びる選挙がいくつも行われました。上記のアメリカ大統領選挙に加え、国内でも東京都知事選があり、自民党総裁選、衆議院選挙、注目を集めた兵庫県知事選挙がありました。これらの選挙で大きな力を発揮したとされるのがSNSです。7月の東京都知事選では、現職の小池氏が危なげなく3選を果たしましたが、注目を浴びたのは、野党第一党が推す候補を上回って第2位の得票数を得た元安芸高田市市長の石丸伸二氏でした。全国レベルでは決して知名度が高いとはいえなかった石丸氏躍進の原動力となったのはSNSでの動画配信だったと言われています。

また、議会と対立し兵庫県知事を失職した齋藤元彦氏は、11月に行われた知事選で勝利、振り返りを果たしました。この選挙でもSNSが大きなポイントになったと言われています。齋藤氏はパワハラ疑いなどでテレビや新聞を始めとするメディアに大きく報道され、県知事を失職しました。しかし、知事選挙戦が始まるとSNSを通じて「実際にはパワハラはなかった」「齋藤氏は既得権益と戦った結果、濡れ衣を着せられた」「テレビや新聞は偏向報道を行った」などの情報が拡散されました。一方でテレビや新聞などの「オールドメディア」は選挙の中立性を保つため、という理由から選挙期間中は沈黙を貫きました。結果として当初の予測を大きく覆し、齋藤氏が再選を果たすこととなったのです。政治とSNSを巡る議論は、現在も続いています。

オールドメディアとSNS、真実を伝えていたのはそのどちらなのか。メディアを通じた間接的な情報しか知り得ない筆者には断言するすべはありません。一つだけはっきりしているのは、オールドメディアとSNSが正反対の情報を伝え、人々はそのどちらを受け入れるのか選択を迫られた、という事実です。今日の前にある情報は、誰がどんな意図で、どのような事実に基づいて発しているのか、その情報を裏付けるエビデンス(注1)は存在するのか、その情報に不整合や矛盾は含まれていないか、などの問いに基づき情報を読み解く能力、いわゆるメディアリテラシーの重要性がますます高まっていることが実感されたのが、筆者にとっての2024年でした。

丸山眞男(注2)はその名著『「であること」と「すること」』の中で、「権利の上に眠る者」はいず

れ権利や自由を喪失してしまう、民主主義は、民主主義という制度が自己目的化することを絶えず警戒、監視し、民主化への絶えざる努力を続けることで初めて民主主義となり得る、と述べています。アメリカで、ヨーロッパで、アジアで、そして日本で、民主主義が揺らいでいます。ナチス・ドイツは民主主義の中から誕生したという歴史を、私たちは忘れてはなりません。私たちが、「権利の上に眠る者」とならず、民主主義への正しい批判者であり続けるためには、柔軟な知性と広い視野、複数の情報を相対的に比較、分析し、真実を見極める力を身につけることが不可欠です。

さまざまな情報があふれる現代、果てしない情報の海の中で真偽を見定め、膨大な事実の中から真実を見出すのは容易なことではありません。しかし、そんな今だからこそ、私たち一人ひとりに、^{しよまつせつ}枝葉末節ではない、物事の本質をつかむ力が求められているのではないのでしょうか。

さて、あと2週間と少しで新しい年が訪れます。何が変わるわけではないかもしれませんが、自分自身を見つめ直し、気持ちを新たにするにはよい機会です。中学、高校時代は、そう望むと望まないと、自分が大きく変わる時期です。その変化を恐れず、未来の自分とじっくり語り合っ
てほしい。そうした自己更新の中から、信じ得るもの、信じるに足るものを見い出してほしい。2025年が君にとって大いなる飛躍の年となることを願います。

それではちょっと早い気もしますが、良いお年を。

注1)エビデンス

事実、真実であることを明らかにする証拠。主張や判断を裏付ける根拠。

注2)丸山眞男(まるやままさお)

1914～1996年。政治学者、思想史家。東京大学名誉教授。『「であること」と『「すること』』は、丸山によって1959年に書かれた近代の古典ともいえる評論で、高校国語の教科書にも数多く採用されている。

※「校長室だより」は、本校のHPにも掲載しています。バックナンバーを読みたい人は、HPの「学校案内」→「校長室だより」からどうぞ。